



『馬師皇五臓論』 訳注

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中吉, 隆之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016793

『馬師皇五臟論』 訳注

中 吉 隆 之

凡例

1. 本書の底本は『司牧安驥集』〔唐〕李石等著、謝成俠校勘、中華書局出版1957年第1版を用いた。
2. 本文は正字、口語訳は新字に統一した。
3. 訳注にあたっては主に次の文献を参照した。
『元亨療馬集選釋』、中国農業科学院中獣医研究所主編、農業出版社、1984年
『司牧安驥集校注』李石等編、鄒介正・和文龍校注、中国農業出版社、2001年

はじめに

2011年、大阪府立大学大学院人間社会学研究科の博士前期課程で、鍼灸師の養成施設に勤務する私は大形徹先生のゼミで学ぶ事になった。先生の研究テーマの一つが神仙思想であり、この思想を知るための基礎資料の一つに前漢の劉向の作とされる『列仙伝』がある。ここに登場する仙人の中に、龍に鍼と漢方薬治療を行った馬医、「馬師皇」の説話が存在する。

馬師皇者、黄帝時馬醫也。知馬形生死之診。治之輒愈。後有龍、下向之、垂耳張口。皇曰、「此龍有病。知我能治。」乃鍼其唇下口中、以甘草湯飲之而愈。後數數有疾、龍出其波、告而求治之。一旦、龍負皇而去。¹

馬師皇なる者は、黄帝の時の馬医なり。馬形生死の診を知る。之を治せば、輒ち愈ゆ。後に龍有り、下りて之に向かひて、耳を垂れ口を張る。皇曰く、「此の龍病有り。我

1 テキストは正統道藏本を用い、平木康平・大形徹、「列仙伝」、『鑑賞 中国の古典 第9巻 抱朴子・列仙伝』、角川書店、1983年、pp.162-164を参照した。

の能く治すを知る」と。乃ち、其の唇下口中に鍼し、甘草湯を以て之に飲ませば、而ち愈ゆ。後に数数疾有らば、龍其の波より出でて、告げ、之を治さんことを求む。一旦、龍、皇を負いて去る。

私は大阪府立大学2011年度人文学会において、ここで記載されている治療法が『列仙伝』の作られた時代の馬医が行っていた可能性のあること、鍼治療の部位が人の施術部位に類似していることを発表した。

さて、獣医学書の中で馬に関する最も早い時期の馬医書として李石撰『司牧安驥集』が存在する。本書は「記録に残る限りにおいて中国唐代の李石の撰、成書年代はほぼ唐末とされる。また李石の原書は現在伝わらず、明代重刊本が僅かに残されているのみである²⁾」と史料としても貴重なものである。また、本書には先に述べた馬師皇に仮託したと考えられる『馬師皇五臟論』が記載されている。本文の構成は、五臓に陰陽五行理論を当てはめて、各臓及び陰陽関係のある腑の特徴と機能を概説した後に、その歌訣を載せる。「五臟論」とは伝統中医学の臓象学説（臓象論）にあたるものと考えられる。「臓象（ぞうしょう）」「臓」とは人体の内臓のことであり、「象」とは象徴あるいは形象という意味を表す。「臓象」とは人体に内在する臓腑の生理活動および病理変化が、人体の外部に象徴的に反映されることを表す用語である³⁾。また、「臓象学説は、中国における永年の経験を基礎とし、さらに陰陽五行理論を吸収して発展した学説であり、中医学における診断、治療上の重要な意義をもっている⁴⁾」とあり、伝統中医学の基礎理論の中でも重要な学説である。例えば、臓象学説では五臓の肝は目に開竅し、視力の低下やドライアイなどの目の症状がある場合は肝の機能低下が考えられる。その場合には肝を治療すれば、それらの症状を改善する事ができるとする。『馬師皇五臟論』は馬の臓象学説を論じている最古の論文の一つであり、現在の中獣医学の理論や『黄帝内経』における人体の五臓の陰陽論と比較検討する際の基礎文献となりうると考え、ここで紹介する。

2 玄幸子著「関西大学図書館蔵抄本『新刊監本増注司牧療馬安驥集』について」、関西大学外国語学部紀要 10巻、2004年、p.71

3 高金亮監修『中医基本用語辞典』、東洋学術出版社、2008年5月第1版第3刷、pp.402-403

4 創医学会学術部主編『漢方用語大辞典』、療原、2007年7月第7版、p.763

『司牧安驥集』 卷二 「馬師皇五臟論」

肝第一

春三箇月、肝旺七十二日⁵；

肝為尚書⁶、肝重三斤十二兩。

肝者外應於目、目即生淚、淚即潤其眼。

肝家納酸、肝為臟、膽為腑。

肝者風為臟、膽者精為腑、肝是臟⁷中之佐⁸

肝為裏、膽為表、肝為陰、膽為陽、肝為虛、膽為實。

肝者外應於東方甲乙木。

肝第一

春の三箇月の間、肝は七十二日間盛んとなる。

肝は尚書^{だいしん}にあたり、肝の重さは三斤十二兩。

肝は外については目に対応し、目は涙を生じ、涙はその目を潤す。

肝は酸を納め、肝は臟であり、胆は腑である。

肝は風、臟であり、胆は精、腑であり、肝は臟の補佐役である。

肝は裏であり、胆は表であり、肝は陰であり、胆は陽であり、肝は虚であり、胆は実である。

肝は外に対しては東方、甲乙、木に対応する。

歌曰：

肝家受病眼睛昏、頭低耳搭少精神。

5 肝旺七十二日：五行学説に照らし合わせて考えると、五臟は四季に配当される。したがって、脾は定まった位置が無く、季節毎の九十日の中に、各々十八日は脾に帰属している。よって、肝は春季の七十二日を主り、これは肝が旺んとなる日である。（『元亨療馬集選釋』、p.22。以下、特に断りが無い限り、中国語の訳は引用者による）

6 尚書：古代の官職で、帝王の補佐を行う大臣。この比喩で肝の馬体内の機能における重要性を述べている。（『司牧安驥集校注』、p.48）

7 臟：原本は「膽」となっていたが、『元亨療馬集選釋』に依拠して改めた。（『元亨療馬集選釋』、p.22）

8 肝是臟中之佐：肝以外の記述は、心是臟中之君、肺是臟中之華蓋、腎是臟中之使、脾是臟中之母のように五臟における異なる役割を述べている。

閃骨⁹生瘡多淚下、胡骨把胯病¹⁰元因。

針須¹¹之間攻左脚、青箱石決樟柳根¹²。

早晨臨臥¹³灌兩上、此病應須眼再明。

歌訣に曰く：

肝が病を受けると眼がぼんやりして霞み、

頭を低くし、耳を垂れて、元気が無い。

閃骨に瘡が生じ、涙が多く落ち、

胡骨把胯病の原因である。

一食の時間に左脚を治療し、

青箱^{せいそう}、石決^{せきけつ}、章柳根^{しょうりゅうこん}などを用いる。

早晩二回施術・投与すれば、この病はきつと再び眼がはっきり見えるようになるはずである。

心第二

夏三箇月、心旺七十二日：

9 閃骨：瞬膜軟骨（楊 英主編、『兽医鍼灸学』、高等教育出版社、2006年、p.303、付録一 畜体骨格及部分解剖部位古今名称対照）

閃骨系瞬膜、又は第三眼瞼と呼ぶ。瞬膜が炎症をおこし、膜の辺縁が骨化して閃骨と呼ばれる。病名は骨眼症と言う。閃骨が乾いて滑らかで無くなど、目を擦って眼に涙を流させて失明させる。

（『司牧安驥集校注』、p.49）

第三眼瞼は内眼角部に位置し、T字型の軟骨板からなり、その内外表面は結膜でおおわれている。（Klaus - Dieter Budras ,Sabine Rok ,橋本 喜春 著、『馬の解剖アトラス第三版 ANATOMY OF THE HORSE An Illustrated Text - THIRD EDITION』、チクサン出版社、p.36）

10 胡骨把胯：胡骨とは形が似ている股骨を指している。胡骨把胯、又は眼（肥えた様子）腿風と呼ぶ。現代獣医学では麻痺性肌紅蛋白尿症という。この病は膘肥肉重で多発し、久しく使役せずに休ませていた馬を、にわかには騎乗して、奔走過急（忙しく走り回り、慌ただしく急がせる）させると、すぐに胡骨把胯症を誘発する。また、多くは後肢に多発する。病気になった馬は突然後ろ脚が麻痺して、直立できなくなる。尿色は紅で、尿がぼたぼた滴る。（『司牧安驥集校注』、p.49）

11 針頃：「針」の音は（fàn）。「針」は「飯」と同じ意味である。「針頃」とは「飯頃」のことで、一回の食事の時間を意味し、時間の短いことを現している。つまり、一回の食事をするほどの短い時間のことである。『史記』に「食頃復入焉」の語がある。（『元亨療馬集選釋』、p.22）

12 青箱子、石決明、樟柳根は眼がかすんで、物がはっきりと見えないものを治す中薬で、平肝明目、平肝舒筋の妙薬である。（『司牧安驥集校注』、p.49）

13 早晨臨臥：早朝と夕方のこと。つまり、一日の早晩に薬を各々一回服薬する。（同上書、p.49）

心為第一、心重一斤十二兩、上有七竅三毛¹⁴。
 心者外應於舌、舌則主血、血則潤其皮毛。
 心家納苦、心為臟、小腸為腑。
 心者血為臟、小腸者受盛之腑、心是臟中之君；
 心為裏、小腸為表、心為陰、小腸為陽、心為虛、小腸為實。
 心者外應於南方丙丁火。

心第二

夏の三箇月の間、心は七十二日間盛んとなる。
 心は最も重要で、心の重さは一斤十二兩、心には七竅三毛が有る。
 心は外に対しては舌に対応し、舌は血を主^{つかさど}り、血はその皮毛を潤す。
 心は苦を納め、心は臟であり、小腸は腑である。
 心は血、臟であり、小腸は受盛の腑であり、心は臟の中の統治者である。
 心は裏であり、小腸は表であり、心は陰であり、小腸は陽であり、心は虚であり、小腸は実である。
 心は外に対しては南方、丙丁、火に対応する。

歌曰：

心家受病連膈痛¹⁵、胃口哽氣又唇蹇¹⁶。

14 上有七竅三毛：七竅とは血液が進出する心臓の七つの孔竅（血管孔）を指す。これらは、右心房の前大静脈孔、後大静脈孔。左心房上に有る三つの肺静脈孔、右心室上に有る肺動脈孔、左心室上に有る大動脈孔の七つの孔である。三毛とは三種類の房室弁と毛髮に似ている腱索を指す。右房室弁は三尖弁、左房室弁は二尖弁、肺動脈と大動脈口には各々、三つの半月弁があり、血液が逆流しないようになっている。この説の初出は『難経・四十二難』：「心重一斤十二兩、中有七竅三毛」である。このことから、馬体解剖が唐代以前にすでに相当高い水準に達していたことが分かる。（同上書、p.50）

15 膈痛：腸痙攣、膈疝、胃痙攣等の病を包括している。その症状は胃口哽氣、幽門痙攣、心臓部の悶痛である（同上書、p.50）

16 蹇：原本は「蹇」とあるが、『司牧安驥集校注』（p.50）、『元亨療馬集選釋』（p.23）に依拠して改めた。唇蹇：馬が自ら口を大きく開いた後に、上唇を巻き上げて、遅々として閉じない状態。まるで微笑んでいるようなので、「蹇唇似笑」の語がある。（『元亨療馬集選釋』、p.23）

多臥少草芻搵土¹⁷、小腸尿血傷心然¹⁸。

麒麟¹⁹沒藥紅芍藥、不限依時童子便。

每藥每日兩度灌²⁰、此馬一定得安全。

歌訣に曰く：

心は病を受け膈痛に及び、胃口は気が塞がりまた昏塞する。

臥していることが多く食欲は無く、口を土にひたし、小腸尿血して心が傷ついたようである。

麒麟^{もつやく こうしゃく}、沒藥、紅芍藥を用いるべきで、これらに限らず時に童子の便に依ることが必要である。

薬毎に毎日二度投薬すれば、この馬は必ず安泰となる。

肺第三

秋三箇月、肺旺七十二日：

肺為丞相²¹、肺重三斤十二兩。

肺者外應於鼻、鼻則主氣、氣則通其榮衛²²。

肺家納辛、肺為臟、大腸為腑。

肺者氣為臟、大腸為傳送之腑²³、肺是臟中之華蓋²⁴；

17 多臥少草芻搵土：精神衰弱し、胸腹部に不快感があり、頤を地面に着けて、頭を前の方に伸ばし、口を地面に擦りつけて、土にひたす。（『司牧安驥集校注』、p.50）

18 小腸尿血傷心然：「然」は「熱」の誤り。按じて原貌のまま改めず。心熱が小腸に移動し、小腸は清濁を分けることができなくなり、溶血性血紅蛋白尿を産生する。『元亨療馬集』によれば、麒麟竭散は馬の肌紅蛋白尿を治療する方剤で、即ち胡骨把膈症を治療する。『安驥方』中では麒麟竭散は腎の傷腰膈痛と尿血の方剤である。（同上書、p.50）

19 麒麟：即ち、血竭。これは麒麟竭散の原型。（同上書、p.50）

20 灌：原本は「囅」とあるが、「囅」の語意は「さげふ」で、意味が通じないために『司牧安驥集校注』（p.50）、『元亨療馬集選釈』（p.23）に依拠して改めた。

21 丞相：過去の官職名の一つ、秦朝に設置されていた。皇帝を補佐して国家の大事を取める重要な職責をもつ。故に『前漢書』の中に「丞天子、助理萬機」の語がある。いわゆる肺為丞相とは、肺が五臓においては心を補佐して血を流す部位で、封建政府機構の丞相に相当する。（『元亨療馬集選釈』、p.24）

22 榮衛：古代、「榮」と「營」とは通用した。榮衛とは營気と衛気を指す。營は脈中を行き身体を栄養し、衛は脈外を行き、体を防衛する働きがある。よって、この二種類の気はみな水穀の精気が気化し、すべて一源より出ている。よって、往々にして榮衛と並べ示される。（同上書、p.24）

23 傳送之腑：大腸が糞便を形成することを指す。糟粕を伝送する腑の一つである。（同上書、p.24）

24 華蓋：原義は帝王の儀仗の内の傘状の薄絹織物の蓋である、これは、肺が五臓の中で傘に似て他の臟腑を覆って蓋をしていることを指す。（『司牧安驥集校注』、p.51）

肺為裏、大腸為表、肺為陰、大腸為陽、肺為虚、大腸為實。

肺者外應於西方庚辛金。

肺第三

秋の三箇月の間、肺は七十二日間盛んとなる。

肺は丞相であり、肺の重さは三斤十二両。

肺は外に対しては鼻に対応し、鼻は氣を主^{つかさど}り、氣はその榮氣と衛氣を通じている。

肺は辛を納め、肺は臟であり、大腸は腑である。

肺は氣、臟であり、大腸は伝送の腑であり、肺は臟中の華蓋^{ふた}である。

肺は裏であり、大腸は表であり、肺は陰であり、大腸は陽であり、肺は虚であり、大腸は実である。

肺は外に対しては西方、庚辛、金に対応する。

歌曰：

肺為華蓋心上存、鼻連西方庚辛金。

皮膚受病鬃尾落²⁵、大腸連脚左邊存²⁶。

膝²⁷顛肉動脚又散²⁸、鼻中膿出病十分²⁹。

醫工見者休辨認、此馬必定救無門。

歌訣に曰く：

肺は華蓋^{ふた}で心の上^{うへ}にあり、鼻は西方の庚辛金に関連する。

25 皮膚受病鬃尾落：肺は皮毛を主り、肺氣が伸びやかに流れていなければ、皮膚が病を受け、鬃毛や尾毛が抜け落ちる。これを肺失清肅と表現している。(同上書、p.51)

26 大腸連脚左邊存：大腸は左、小腸は右にある。これは、古代人が人体に対する経験を根拠に、排便前にたまった糞便の多くが左下腹部で触診できるようになって得た認識である。馬体の解剖で、大小腸共に左右に分けられないことは知っていた。「大腸連脚左邊存」とは馬糞結の時、医者は右手を直腸に伸ばし入れて、触按して病糞を探し出し、手の平で馬の左腹の片側に按压する。これは、病糞を左腹壁に推移、固定、按压、切り割りと打ち砕く。といった様なことである。(同上書、p.51)

27 膝：牛馬の腰の後ろのくぼんだところ。(『大漢和辞典』諸橋轍次 著、大修館書店)

28 脚又散：病勢がとても重い場合に出現する歩行が乱れる症状の一つ。(『元亨療馬集選釋』、p.25)

29 鼻中膿出病十分：古代において馬鼻の中に膿出する病は、多くは馬鼻の痘病で、肺に発生する壞疽と化膿性肺炎などの病変である。また、病は已に後期に到達し、死が間近で、病が極点の状態である。病が発症してから発展し、近く死が訪れる。すでに極点であることを告げている。(『司牧安驥集校注』、pp.51-52)

皮膚は病を受けるとたてがみと尾毛が抜け落ち、大腸は左脚に連なり存在する。

膝震え肉動きさらに歩行が乱れ、鼻中に膿が出て病は極点に達する。

医者はおはや診療をやめよ、もはやこの馬を救う道は無い。

腎第四

冬三箇月、腎旺七十二日；

腎為烈女³⁰、腎有兩箇、左則為腎、右則為命門³¹、腎重一斤十二兩。

腎者外應於耳、腎即生津液³²、津液壯其骨。

腎家納鹹、腎為臟、膀胱為腑。

腎者水為臟、膀胱為津液之腑、腎是臟中之使；

腎為裏、膀胱為表、腎為陰、膀胱為陽、腎為虛、膀胱為實。

腎者外應於北方壬癸水。

腎第四

冬の三箇月の間、腎は七十二日間盛んとなる。

腎は烈女であり、腎は二つ有り、左は腎、右は命門であり、腎の重さは一斤十二兩。

腎は外に対しては耳に対応し、腎は津液を生じ、津液はその骨を壮にする。

腎は鹹を納め、腎は臟であり、膀胱は腑である。

腎は水、臟であり、膀胱は津液の腑であり、腎は臟中の使である。

腎は裏であり、膀胱は表であり、腎は陰であり、膀胱は陽であり、腎は虚であり、膀胱は実である。

腎は外に対しては北方、壬癸、水に対応する。

30 列女：按ずるに、古い意味は強くて真っ直ぐで、節操の有る女性を指す。「腎為烈女」とは、腎を禁宮への侵犯が許されないことで形容し、同時に腎臓が貴重で重要で有ることの比喩としても用いている。（『元亨療馬集選釋』、p.25）

31 命門：生命之門、又は「命関」と称し、性命の関鍵を為している。古代の人は腎が命門之火を寄せている事を認めていた。命火は生命の本元の火で、陰中に住まい、性機能と生殖能力の基礎であり、さらに、五臓六腑を温陽できる。臟腑は命火の温煦能力が発揮されることで正常に機能する。（『司牧安驥集校注』、p.52）

32 津液：体内の各種の正常な水液の総称、汗、血、精、涎、および涙等である。一般に、皮膚に汗、肉に血、腎に精、口に涎、目に涙、すべて栄養と濡潤の作用を有する。津と液は区別することが可能で、一般に、筋肉を充養し、皮膚を潤沢し、比較的澄んでいて稀薄なものを「津」とよび、関節を潤滑し、孔竅を充養し、脳髓を補い助け、流れても流れない（比較的粘りがあり濁っている）ものを「液」とよぶ。（『元亨療馬集選釋』、p.25）

歌曰：

腎家受病切須知、後脚難擡耳又垂³³。

心連小腸尿更澁³⁴、膀胱邪氣透入脾³⁵。

限料早辰空草³⁶ 嚙³⁷、苦棟草 茴香 青橘皮。

脚重頭低陰又腫³⁸、此馬必定可憂疑。

歌訣に曰く：

腎が病を受けたら次のことを知らなければならない、後ろ脚は挙げにくく、耳が垂れ下がる。

心は小腸に連なり尿は更に澁り、膀胱の邪気は脾に透入する。

飼料を制限し早朝に貝草を投与し、苦棟草、茴香、青橘皮を投与せよ。

脚が重く頭を低くし陰部が腫れたら、この馬は必ず（腎の病を）憂い疑わなければならない。

脾第五

四季脾旺³⁹、毎季各旺一十八日、共旺七十二日；

33 後脚難擡耳又垂：腰は腎の府で、馬が後ろ脚を持ち上げ難いのは、馬が腎虚で寒邪を受けた腰膀痛でよく見かける症状である。耳が垂れ下がり、頭を低くするのはよく見かける精神不振の病状であり、腎不藏精、腎虚腰膀痛と過労疲憊の時にも見ることができる。（『司牧安驥集校注』、p.52）

34 心連小腸尿更澁：心と小腸は表裏関係があり、もし心火が旺んになり、小腸に熱が移ったならば、それは清濁を分別する機能に影響する可能性がある。従って、まもなく小便赤澁となる。（『元亨療馬集選釋』、p.26）

35 膀胱邪氣透入脾：膀胱が邪を受け、気化できず、尿閉、胞轉（妊娠時の小便不利）、砂石淋などの症状が発生することを指す。排尿がよく通じないのは邪気が脾に入り、脾土が腎水を制約できないようにさせたために、後肢の水腫と尿毒症などが発生する。（『司牧安驥集校注』、p.53）

36 空草：貝草のことである。神農本草経中品「一名空草。味は辛く平。……、風痙を治す。」（木下武司著、『歴代日本薬局方収載 生薬大辞典』、ガイアブックス、2015年、p.302）

37 嚙：原本は「嚙」とあるが、「嚙」の語意は「さげふ」で、意味が通じないために『司牧安驥集校注』（p.52）に依拠して改めた。

38 陰又腫：雄と雌の家畜の外生殖器に発生する腫脹を指す。（同上書、p.52）

39 四季脾旺：脾とその他の四臓は同じでは無く、脾は春夏秋冬毎に一つの季節のそれぞれ終り十八日間旺んとなり、合せて七十二日間旺んになる。四季脾旺とは、脾が季節毎の終りの十八日間に均しく旺んであることを指す。（『元亨療馬集選釋』、p.26）

脾無正位⁴⁰、胃為大夫⁴¹、脾重一斤二兩。

脾者外應於唇、唇即生涎、涎即潤其肉。

脾家納甜、脾為臟、胃為腑。

脾者土為臟、胃者草穀之腑、脾是臟中之母⁴²；

脾為裏、胃為表、脾為陰、胃為陽、脾為虛、胃為實。

脾者外應於中央戊己土。

脾第五

四季に脾は盛んとなり、季節毎に各々十八日間盛んとなるから、合わせて七十二日間盛んとなる。

脾は正位が無く、胃は大夫であり、脾の重さは一斤二兩。

脾は外に対しては唇に対応し、脾は唾液を生じ、唾液はその肉を潤す。

脾は甜^{あま}を納め、脾は臟であり、胃は腑である。

脾は土、臟であり、胃は草穀の腑であり、脾は臟中の母である。

脾は裏であり、胃は表であり、脾は陰であり、胃は陽であり、脾は虚であり、胃は実である。

脾は外に対しては中央、戊己、土に対応する。

歌曰

脾無正位號中央⁴³、雙抽兩脇連膀胱⁴⁴。

40 脾無正位：原本は「脾為正位」とあるが、『司牧安驥集校注』（p.53）、『元亨療馬集選釈』（p.26）に依拠して改めた。脾は正位が無い。原本は「脾為正位」とあるが、これは脾が中央戊己土、即ち五行と方位の関係で考えると、土の位置は中央で、脾は正位にふさわしい。但し、五臓を四季に配分すると、たとえ脾が長夏を主っている、やはり脾は各季節の終り十八日間で旺んになるので正位は無く、すべての季節で旺んとなる脾と一つの季節で旺んとなる他の四臓は同じでは無い。つまり、脾は「無正位」である。（同上書、p.26）

41 胃為大夫：大夫は昔の封建政府の中にあっては、公卿以下の地位にある官職名の一つである。ここでは、五臓の中における胃の地位と働きを喩えている。（同上書、p.26）

42 脾是臟中之母：脾は後天の本で、脾は中宮に対応し、土に属し、土は万物を生む能力がある。それ故に、土に所属し、万物の母である脾は臟中の母と見なす。（同上書、p.26）中宮は、皇后の居る宮殿。又、皇后。漢代に始まる。（『大漢和辞典』諸橋轍次 著、大修館書店）

43 脾無正位號中央：これは脾と方位の関連を指しており、方位には身をおくべき正しい位置は無く、中央、戊己、土に属す。（『元亨療馬集選釈』、p.26）

44 雙抽兩脇連膀胱：脾は草穀の精微の運化を主る。脾の病は馬の不食、或いは水草遅細で、両方の脇部が吊り上がり、腹部はとても細くなる。水湿が運ばれず、膀胱は水湿を気化させることができない。そのために、膀胱に波及して病む。（『司牧安驥集校注』、p.54）

多臥少草又哽⁴⁵氣、唇乾舌燥⁴⁶口生瘡。

生姜和蜜并菉豆、砂糖四兩用消黃⁴⁷。

氣藥健脾針脾穴⁴⁸、此馬驗認是脾黃⁴⁹。

歌訣に曰く：

脾には正位が無く中央と呼び、両側の^{こし}廉がつり上がって病は膀胱に連なる。

身体を横たえる事が多く、食欲が無く、また食べ物が咽につかえ、唇は乾き、舌は乾燥し、口に瘡が生じる。

生姜と蜜ならびに緑豆と、砂糖四両を加えて消黄散に用いよ。

補氣健脾薬を投与し脾俞穴に鍼を行え、この馬は脾黄であると診断される。

45 哽：息がつまる。食べ物が咽につかへる。(『大漢和辞典』諸橋轍次著、大修館書店)

46 唇乾舌燥：「燥」の文字は原本では舌「上」とあるが『司牧安驥集校注』に依拠して改めた。舌上ではここにおいては意味をなさない。従って上下の文をみることで、「上」の文字を「燥」の文字の誤りとして、舌燥の症状として、特に改めた。(『司牧安驥集校注』、p.54)

47 消黄：硝黄散の類いの方剤を指す。(同上書、p.54)

48 氣藥健脾針脾穴：氣藥健脾は健脾散等の補氣健脾薬といった類いの薬を指す。脾穴は広く脾経の諸穴を指している。ここでは主に、脾俞穴を指している。(同上書、p.54)

49 脾黄：病名。本書『司牧安驥集』の『天主置三十六黄病源歌』脾黄第二十七と注釈を参考のこと。また、脾黄は「冷草を食むことで脾が傷つき口色が黄色になる」病の事を指す。(同上書、p.54)